「考えること」が明確なスピーチ原稿づくりをめざして

神奈川県横浜市立稲荷台小学校
小林　京子

四年生のYさんは、総合的な学習で、まちのSさんと出会い、今まで消極的だった自分がかわっていったことについて、家族や友達にスピーチで伝えたいと考えていた。

わたしたちはこのような「思い」を子ども達が持てるようになることを大切にし、「国語の学習の入り口」と呼んでいる。この学習の入り口が充実していると、子ども達は「国語の時間にわかりやすいスピーチができるようになりたい。」と学習の必然性を感じ、主体的に学ぶようになる。

Yさんは「十才を祝う会」で家族に発表することになったスピーチ原稿を意欲的に仕上げた。論展開も見事なものであり、主体的に学習を進めていくことができた。

何が効果的だったのか。

中学年では、「自分の考えがわかるように筋道を立てて話す」ことが重要な指導事項である。そのことを子ども達が意識できるスピーチ原稿をつくるようにした。「はじめ・なか・おわり」の文章構成が明確になるように、それぞれを「ピンク、黄色、青」の色別作文用紙にした。「約五百文字を一分半でスピーチする」ことに合わせたマス目の作文用紙を用意し、その中に納まるように書く。また、色別にどういった内容のことを書けば自分の思いが伝わるのか説明文教材から学び、確認した。

今回Yさんにじっくり考えさせたいのは、「自分の体験をどのように表現するか」という内容である。だからあらかじめ、「伝えるために必要な枠組み」をつくっておいたのである。ただこれだけのことで、Yさんは主体的に自分が伝えたいことをじっくりと考えることができた。

Yさんは学習の入り口で、「どうしても伝えたいこと」「どうしても伝えたい人」を明確にもっていた。「内容」（何を表現したいのか）を十分もっていたYさんにとって、伝えるための「方法」（どのように表現すればよいのか）が得られるように設定したことが効果的だったのである。

Yさんの学習を支えたものは、

① 学習の入り口の充実

② 「内容的な学び」を充実させるため「方法的な学び」の工夫

である。全ての思考力を一度に指導していくのは無理がある。本当に育てたい「考える力」を絞って指導していきたい。

こばやし　きょうこ　横浜市立稲荷台小学校教諭。どんな質問にもわかりやすく答えてくれる先輩とよく動く後輩に支えられて、校内研究の推進をしている。